続・あね日記

美希マコト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
続・あね日記

【Ｎコード】
Ｎ６８０１Ｓ

【作者名】
美希マコト

【あらすじ】
これは、姉に振り回される妹の日記である。
よって以下の２点について注意が必要である。

?私（妹）の感想である
?姉がおかしいのは仕様である

「――バンドをやります」

家族４人揃っての楽しい夕食時に、突拍子もなく姉が言い放った。
しかし、私たち家族にとって、姉の”突拍子もない思いつき”に関しては日常茶飯事なので、軽く流したのは当然の対処である。

「べ、別に、アンタたちの為にやるんじゃないんだからねッ！」

（そりゃそうだ）

姉の思いつきが私たちの為なものか……そんな事があるわけがない。
本当に、心の底から、私たちの為にやってるんじゃない。

「もう、私がいないと何もできないんだからッ！」

そう言いつつ、自分の食器を流し台に持っていく姉。
確認作業になるが、あの食器は姉のだ。

説明書きが少し遅れてしまったようですが、この明らかにおかしな姉については仕様なので、ツッコむべき箇所ではない。
今ツッコミをいれなければならないのは――この口調だろうか。

近年定義が曖昧になってきているが、これは明らかに”ツンデレ”というやつだろう。
しかも、このあからさま感極まりないタイプのは、アニメか漫画か、ライトノベル辺りのタイプであろう。

というとこから導き出される結論は、姉が最近それらにハマっているという事になるのだろう。そうに違いない。

「ふんッ……洗ってるあげるわよッ！私が私の食器を洗ってあげるわよッ！」

心配しないでほしい。昔、姉を精神病に連れて行った事もあるので、どうか心配しないでほしい。

診断結果はもちろん正常だったので、これは姉のチャームポイントだ。うん、そうなのだ。

「もう！あんた達なんか勝手に練習してればいいじゃない！」

「あと！どうせ――どうせ、2次元なんて規制されちゃうんだからねッ！」

食器を洗い終わった姉は、最後の最後でやや現実味のある事を言い捨て、自分の部屋へ去って行った。

あんた、その2次元にハマってるんとちゃうんかい。と、問いただしたくなったが、それは無駄な労力となるだろう。軽く流すべき内容だ。

――カラッ、カラカラ

どうしたことだろう、父が動揺しているのか、手に持っていた箸を落としたではないか。

汗の量が尋常じゃない。この流れから連想される事柄は”父はこっそり、アニメなどを嗜んでいる”しか導けないわけだが……。

「ご、ごごちそうさま」

（もう駄目だ、私の父はオタクだったのか、動揺が露骨すぎる）

フラフラと力なく歩く父の背中は、どこか寂しげに見えた。

さて、そんな事があった日の夜、ベッドの中で、ふと思い返したんだが、事の始まりは姉が”バンドをやります”と言ったところだという事に気がついたが……あれは単なる思いつき。そう頭で処理して、私は眠りについ――

「――妹！妹よ！！　私の歌を聴いてくれ」

息を切らしながら私の部屋に飛び込んできた姉が私のつかの間ぬ休息を妨げる。

寝る瞬間が大好きな私としては、この行為は万死に値するのだが……

「妹よ……私は今――真面目だ。久しぶりに」

「自覚はあったんだね……」

そこまで言うならと、私は渋々姉の歌を一曲聴く覚悟をした。

「べ、別にアンタの為に歌うんじゃないんだからねッ！　♪私は～――」

「ちょっと待って、今の最初の何だったの？ねぇ」

「も、もうッ！何！？　最初はセリフから入るのッ！」

ぁあ～そういう系なのか、と私は既に聴く気がそがれてしまった。

「べ、別にアンタの為に歌うんじゃないんだからねッ！　♪私は～
そんなに～ドジっ子よ～」

こりゃ駄目だと思いつつも、謎の歌を1分30秒（TVサイズ）聴いてしまった。

「で、どうだった？　べ、別にアンタの為に歌ったんじゃないんだからねッ！」
「……」
「何か感想をいいなさいよッ！」
「あぁ、てっきりもう1曲始まるのかと思った」
「べ、別にアンタの――」
「いいから、本当に歌わなくていいから」

「聴いたでしょ！だから――だから私はバンドがやりたいッ！」
「ちょっと話の跳躍力が――」
「そして始めた……まずはラップ」
「いらない、それはいらない。私たちにはサランラップだけで十分な――」
「だけど、私の力が未熟だったばっかりに――こんな結果に……」
「うん」
「だから――だから私はバンドがやりたいッ！」
「ごめん、お姉ちゃん。省いた過程をもうちょっと説明して――」
「そして始めた……まずはラップ」
「聞いた、それは聞いたよ。その話はファイナルラップにしてよ」
「それはここまでの話をもう1周しなさいってことなの？」
「……雰囲気で分かってよ、こっちがスベッたみたいになるじゃない」

「――ふんだッ！もう知らないんだからねッ！　アンタなんか勝手に練習してればいいじゃない！！」

私の前にベースが置かれた。
唐突すぎてさっぱり意味が分からないし、話の流れを考えるともっと意味が分からないが、とにかく奴は割と本気なんだということが伺える。

姉は私の部屋を出る寸前「まぁ私が教えてあげてもいいんだけどねッ」みたいな事を言っていたが、あまり本気にしていなかった私は、とりあえずそのベースを姉の部屋のドアに立てかけて、その後直ぐに寝た。

――バンドなんて不可能にきまってる。

しかし、現実は甘くなかったのである。
なぜに姉に対して現実は甘くなるのだろか。

私は今、大勢の人の前でベースを抱えているではないか。
母さんが手にしているのはドラムのスティックではなく、菜箸だと信じたい。

そして父さんにいたっては――――何も持っていなかった。
せめて何か持たせてあげて！！逆に可愛そう！！　棒立ちの難易度は無限大！！

この忌まわしき宴は……町内の敬老祝賀会的なヤツである。
その昔、私がまだ”こども会”という名の町内会的なものに加入していた時、『ひょっとこ踊り』という名の羞恥プレイをさせられ

たこともある忌まわしき、ご老体どもを祭る――
ゴホン、失礼。ご年配方に日ごろの感謝の気持ちを込めて羞恥プレイさせていただいた、忌まわしきお祭りです。
その出し物のトップバッターがなぜか私たち一家によるバンド演奏になっている。
「イェスイェス！　これが　マイファミリー！！　ＯＫ、騒げー！！セイ　ＨＯＯ！！！！」
（どうしてだろう、姉のＭＣがラップよりなのはなぜなんだろう）
もはやそんなツッコミをする余裕すらなかったわけだが、姉のＭＣはまだ続く。
「オーケイ、まずは、まじでヤバいメンバー紹介しちゃうぜッ！！」
（地獄のコールが始まるわけか）
私は身構えつつも、もう下を向く事しかできなかった。
両親の姿さえも見る事が出来なかった、何も楽器を持たされていない父がどうしているのか少し気になったが、自分の事で精一杯だったので全力で下を向いた。
「まずは――トップバッター！ボイス＆ギター！　私こと――ゴッド！！」
ボーカルと訂正する気にもならないほどの粗行事だ。
これはもはやリングネームだ。これから私はここでデスゲームをするのだ、だったらそれに相応しい名前を付けてほしい。

「そして――ベース！――リトル　オー　マイ　ゴッド！！」

（言いたい事は分かる。だけどやめてくれ「オーマイ」は外してくれ、私がどういう状態なのか想像がつかないから止めてくれ）

姉の粗行事はまだ続く――

「ドラム――ＢＢＡ！！！！」

（なんてこった）

悲劇は起こった。母のリングネームが『ＢＢＡ』に決まった瞬間悲劇が起こった。

いや、これは悲劇などではなく――奇跡だったのだ。

”楽器＝なし”のはずの父が姉のギターとマイクを奪い取っていた。気がついた時には奪い取っていたのだ。

後日、近所のおばあちゃんにビデオで確認させてもらったのだが、母のリングネームを告げた瞬間、父が凄い形相で姉に襲いかかって連続攻撃を仕掛けていた。

↓↓（ステップ）　（しゃがみ）弱キック　弱パンチ　←（ため）→キック

その目にもとまらぬ早業で、姉からギターとマイクを奪い取ったのであった。

そこからはとんでもない、リトルどころか、生まれて初めて『オ

ーマイゴッド』と天を仰ぎたくなるような展開だった。

「この町に――死神が帰ってきたぜぜえええええええきゃッはーーーーー！！Ｆｕｃｋ　Ｆｕｃｋ　Ｆｕｕｕｕｕｕｕｕｕｕｕｕｕｃｋ！！！！！！　Ｃｏｍｏｎ　ｍｙ　ｗｉｆｅ　Ｌｅｔ'ｓ　Ｇｏ！！！！！！！！！！！！！！」

母こと『ＢＢＡ』の凄まじく早いビートと、父のうねるようなギターの音。

そして全て英語で何を言ってるのか分からないが、投げつけ、叩きつけるような声。

（ロックだ――）

この時ばかりは、両親の姿かたちを１０年戻してあげたかった。

無い髪を振り乱し、言葉通り”禿げ散らかす”父と、いつだって絶賛妊娠中の母。

どやっても見苦しい２人の姿だったが……その姿は輝いていた。

どこかへ吹き飛ばされていたはずの姉も「わっちだって、感動したんだもん！！」と、よくわからない反応をしていたが、とにかく”凄い”と思っているようで、姉のバンドへの浅はか過ぎる夢を完全に打ち砕いたようだ。

「妹よ……わっちは、旅に出る」

そう言い残して、ご老体どもが手を上げて飛び跳ね、騒ぐ会場を去って行った。

その1分後、私もステージ脇から、場違いな空気を感じ取り、家路に着いた。

その後は大変だった、町を歩けば「若いころは～系」や「これでもう思い残すことはない系」など、とにかく両親を称えるお褒めの言葉いただきまくる事となり、微妙に有名人となった。

正確なこと言うと、私の両親は昔はそこそこ有名なバンドを組んでいた。という話である

そのバンド名が『ＢＢＡ（ビービーエー）』

ＢＢＡ（ブラダオレンス）（アナーキー）の頭文字を取ったという……なんという偶然。

姉の付けた直球リングネームが、両親の封印した記憶を呼び起こしてしまったのだろう――

「ふむ……こんなもんかな」

走り書きになってしまったが、今日も日記を付け終わり、そのままベッドへダイブ。

（ふぅ～む――）

よくよく考えると、あの日の父の動揺は、血が騒ぐ的なことだったのだろう。

よかった、父がオタクでなくてよかった。そんな事を思いつつ私は眠りにつ――――

「イェー！調子はどうＤＡッマイシスター！！」
「……」
「Ｙｏ！　父の残像！　まるで服部半蔵！」
「……」
「あの日の感じた　私の無力さ　一人ぼっちのわっちの努力さ――」

姉の被っているツバの真っ直ぐなキャップを乱暴に剥ぎ取り、そしてどういう意図なのか知らないが、そのキャップのツバの部分に貼らてある、あの丸いシールを剥ぎ取った後、フリスビー的な感覚で窓からそれを投げ捨てた。

「おやすみ」
「待て！待つんだ！　1分で方を付けてやるから」
「んー、めんどい、眠い」

「私は悟りを開いたのだ」
「……いつも開いてるじゃん」

「そこでッ！提案があるんだ！！妹――いえ、今はリトルオーマイゴッドと呼んだ方がいいのかしら」
「はいはい、ゴッドゴッド」
「／／／」
「じゃねー、おやすみーお姉ちゃん」

「ごめん」
「はい」

「……」
「……」

「ラップがした――ゴフッ！」
「1分で方をつけてやったよ……お姉ちゃん、おやすみ」
気絶した姉にちょっとダサい捨て台詞を吐き捨て、私は寝た。
おわり。

（後書き）

町内の敬老祝賀会的なイベントで『ひょっとこ踊り』なる不思議な踊りをしたという事実のみがノンフィクションです。

その他の設定などは１～１０まで全てフィクションです。

今回は予定通り会話文を多くしてみた形になりましたが……どうなのでしょうか、個人的には若干長すぎて（単調すぎて）ダレているような気はします。

よろしければ、その辺りの「悪い点」を書いてほしいな、などと思ってます。

ありがとうございました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6801s/

続・あね日記

2011年10月8日23時35分発行